

二世紀の家族

筑紫哲也

chiyoshi tetsuya

絆

小澤征爾氏から五嶋龍君（五嶋みどりさんの弟）まで、クラシックの世界で活躍している国際的な日本人アーティストは数えきれないほどいる。本来は西洋の音楽なのに、東洋の日本人がそれを演奏することに最初は違和感や偏見もあったというが、今ではそれは昔の話である。普段は世界中に散在している演奏家たちが「里帰り」の形で結集するサイトウキネン・オーケストラは世界最高のオーケストラのひとつである（私は「ひとつ」ではなく「最高」だと個人的には思っているが）。

だが、やがては少なくとも数の上では中国人、韓国人に追い抜かれる日が来るだろうと言われている。

彼らのほうが日本人より才能の点で優っている、という理由からではない。

大きなちがいは「家族」である。

戦後、地縁、血縁の解体が急速に進み、核家族化、個人化した社会となった日本に較べて、中国、韓国ではそれらが未だに健在である。小澤征爾氏は若いころ単身、スクーターに乗って世界を駆けめぐり、自分の道を切り拓いていったことで有名だが、日本人の場合、「個人技」か、よくて本人の母親の自己犠牲の上で開花するケースがほとんどだ。だが、中

国人、韓国人の場合は、家族のなかに才能の可能性を見るやいなや、それをバックアップするのは大家族（一門）の総力をあげての努力となるのが普通だという。

個人技と総力戦ではやがて差が出てくるだろうというのが、中・韓優位説の根拠となっている。

では、時にはそういう役割を演ずることもある「家族」とは一体、何なのだろうか。

そして、それは時代とともにどう変わってきたのか。これからどう変わっていくのか。

日本がアジアのなかで突出して「先進国」（サミットの唯一のメンバー）になるとともに、アジアのなかで突出して家族の解体が進んだのは、互いに無関係ではない。戦後、私たちは経済と効率を重視する社会を作った。それは何ごとにも「対価」が求められる社会である。

冷戦を経て資本主義とそのリーダー、アメリカが「ひとり勝ち」し、その主導で進められている「世界化」（グローバルイゼーション）は、この流れをますます加速するだろう。逆に言えば、そういうなかで、ほとんど唯一、「対価」を求めない仕組みが「家族」だとも言うことができる。親が子を育てる時、子が親に尽くす時、その行為の軸になるのは無償の愛情であり、経済原則による等価交換がそこ

に働いているわけではない。

人類の歴史のなかでは、「家族」の他に、非経済原則で支えられた装置として宗教が大きな役割を果たしてきた。「きた」と過去形を使わざるをえないのは、二〇世紀がそれを「呪縛」と見なし、代りに人間の能力に無限の信頼を置いて、ほとんど自らを信仰の対象として進んできた世紀だからである。そういうなかで、私たちの社会でも宗教の相対的位置は低下し、しかもその営みに経済原則が深く浸透した。いわば宗教の商業化が進み、そこは多くの場合、「対価」が要る世界と化した。

もちろん、「家族」もこのような社会の変化のなかで侵食される。変容を遂げる。もはや崩壊している場合も少なくない。

経済合理的、効率的であることが私たちを幸せにしているのなら、それもひとつの選択かもしれない。が、どうもそうは思えないことが次々と続き続けている。

西暦紀元ではあるが世紀が変わって、新しい時代に入ると言うのなら、考えなくてはいけないことが「家族」についても多々ある。

その出発点は、前述のような「世界化」が進めば進むほど、その原則（弱肉強食の色がいまのところきわめて強い）に対抗し、均衡を少しでも保つためには、「家族」の持つ価値が唯一、貴重なものであることが広く認識されることである。IT革命など、科学技術

が発達し、私たちの生活のなかで擬似的現実（バーチャル・リアリティ）の比重が大きくなればなるほど、現実（リアリティ）のなかでの自然環境の持つ意味が大きくなる、という関係とそれは似ている。

次に大切なのは、そうは言っても変わっていく社会環境のなかで、新しい家族、と言うよりその根底にある価値である「絆」、人々とのつながりのありようをさまざまに摸索し、作り上げていくことである。これも、地域社会が崩壊しているなかで、ボランティアなど共生のネットワークを探る動きが大事になっていくのと似通っている。血縁だけを重視した「狭い」定義の家族では、人のつながりは保てない時代かもしれないし、「絆」が目的であり、「家族」はその大事な手段のひとつだと考えれば、別の「絆」があってもよいだろう。JR新大久保駅での日韓二人の行動は、家族愛とは直接関係ないが、他者であっても人を自分たちの一員とみなすという点では、「絆」と無縁ではない。

サイトウキネン・オーケストラが素晴らしいのは、お金のためではなく、日本にクラシック演奏を根付かせた斎藤秀雄という人を慕い、記念して集まる、いわば音楽家族の演奏だからだろう。